

思い出す人々

西山 厚 全24回

第12回 【山口誓子】

父が徳島大学に勤めることになり、わが家は東京から徳島に引っ越して、私は生まれました。

やがて父は皇学館大学へ移ることになり、わが家は徳島から伊勢に引っ越した。

そして山口誓子を知った。療養のため四日市に居を移した誓子は、伊勢にも足を延ばし、伊勢を深く愛した。句碑が建ち、近年、山口誓子俳句館もできた。

父は、時折、誓子の句をつぶやいていた。

学問のさびしさに堪へ炭をつぐ

父は学者だった。わが家で調べ物をしたり思索にふけったり原稿を書いている父の後ろ姿は、今も目に焼き付いている。

父は子煩悩で、私は父にとっても可愛がられたが、そういう時の父には決して近づいてはいけなないと、母に言い聞かされていた。

昭和20年（1945）、誓子は空襲で一切の蔵書と家財を失った。二年後、近所からの出火で、父も一切の蔵書と家財を失った。

学問はさびしい。きびしいのではなく、さびしい。